

基調講演「復興の物語を作り出すために、ジオパーク構想の活用を」

時事通信社山形支局長・静岡大学防災総合センター客員教授 中川和之氏

○司会 お待たせ致しました。ただいまより、基調講演を頂戴いたします。

中川和之さまは、日本大学芸術学部を卒業後、時事通信社入社、社会部に配属され、長年の気象庁担当などを通じて地震や火山を学び、災害関係学会の委員として多方面に活動されてこられました。

また、日本地震学会の立場から、日本ジオパーク委員会の委員になっているほか、記者としてだけではなく、市民の立場から災害対策のあるべき姿を模索し、中央防災会議や内閣府、厚生労働省などの各種委員会の委員や、災害に関わるNPOの理事なども務めていらっしゃいます。

現在は、時事通信社山形支局長のほか静岡大学防災総合センター客員教授、名古屋大学非常勤講師も務めていらっしゃいます。本日は、「復興の物語を作り出すために、ジオパーク構想の活用を」と題しまして、ご講演を頂戴致します。それでは、中川先生よりしくお願い致します。

○中川 すみません、こんにちは。時事通信の中川でございます。

先生なんて言われると、どこに身を置いていいのかわからない、新聞記者風情がなんでこんなところでお話するかというのは、おいおいお話しを。話のなかに少し自己紹介も、くどいかもしれませんがさせていただきます。

記者人生31年になるんですけども、前半15年ぐらいはどちらかというと、事件と科学をやってきたんです。ややけしからんというか、世の中に対して決してプラスの情報はありません。あまり出してこなかったなと思うんです。

後半は、この地震のあとということもありますけども、何か自分にできることということでやってまいりまして、いまこのような立場をいただいたりしております。そういうところで、今回お手伝いが何かさせていただけるということでまいりました。よろしくお願いたします。

先ほど、時事通信に入ったのも、これもたまたまなんでございますが、入ったときに最初やらされたことが、「大規模地震対策特別措置法」ができて間もなかったのも、もし東海地震があったらというような予定稿を、理科年表を元に、世界の地震、日本の地震なんていうのをつくったのが、本当に私の一番最初の仕事でした。これも、全然偶然なんです。

それと、名古屋勤務をしておりまして、長野県西部地震がございまして。最近ですと岩手宮城のような、こういう火山直下での地震ですから、がさっと崩れたりするようなことがあって、山体崩壊もあります。

これは、山体崩壊の土砂が流れてきたところをトンネルのところ辺りから撮っている。

この上がもし崩れてきたら、あほたれだと思うんですけど、こんなところで平気で何も考えずに写真を撮っていたんですが、そのときに山体崩壊というような珍しい現象があったということもあって、名古屋大学の取材などもし、それで知り合った研究者の方が、後々地震学会の会長になって科学者になったあと、たまたま学会の会場で「お久しぶり」なんて話をして、学会に誘われ。今回の地震の前から、地震学会に入っておりました。

1995年1月に、私が育った地元で阪神淡路大震災がありまして。その辺から一人の記者というところから活動記者になっていったんじゃないかと思っております。

この下が阪急電車です。この辺から六甲山が出てくるんですが。失礼なんですけども、こういう住宅があるところと山とが密接しているところで、なんでこんな裏山が崖のようなどいうか、壁のような山があるかよくわからずに、緑が豊富でいいところだなと思ってわれわれは暮らしておったわけです。ところが、この向こう側からやってきたやつが、こいつでございました。

(映像)

この映像を、ご覧になった方もいらっしゃると思いますけども、兵庫県神戸市にある人と防災未来センターというところで、最初に写している「1.17 シアター」という、7分半ぐらいの映像のサマリー版なんです。ある意味この映像というのは、失敗をしたというか、これは震災を失敗したことだけではなくて、これぐらいしか残せなかったということが、私は最近、失敗だなというふうに気付いて、この映像を説明しているんですが、つい最近、兵庫県の当時の初代の防災館が同じことを申しております。「何も残せなかった、これしか残せなかったというのは残念である」ということを新聞記事で語っています。

当時、「人と防災を目指して」。ここに書いてありますが、「当時センターの設置を担ったものとして、いまだに、これを映像の再現しか充分伝えられないけれど、それしか残せなかったのを悔やんでいる」というふうにあります。

そういう、一つの証拠でもあるわけですが、これしか残せてありません。気がついたら、何もなくなっていました。私は当日、記者モードで、地震があったときは横浜の自宅におりまして、6時前に会社から電話があり、すぐ実家へ電話したら電話がつながって、親の安否もわかった上で、初日の夜に現地へ入ったんですけども、途中取材のつもりでいろんなものを見たり、写真を撮ったりしていたんですが、震度7のエリアに入っていた途端に、どう表現していいのかわからない状況が周りに展開していて、一緒に行った先輩、後輩も同じようにタクシーの中で押し黙っていたんです。これは書ききれないなど。記者として情けないことではあるのかもしれませんが、どう書いていいかさっぱりわからない。

とにかく、そのこと、見たこと、感じたことを体に覚えておくしかないだろう。まち

のなかが静まり返っている、遠くでピーポーの音が聞こえるとか、周りじゅうそこらじゅうが壊れているとか。いま 3.11 をあとにすると、それでも生っちょろかったなと思うところもありますけれども、とにかくこれを覚えておくしかないなと思ひまして。ちよっと、どうもここは記者でいられたところだったように思っております。こんなところを見てきたわけです。

私たちが、先ほど見せた、この地元の風景とどう向き合うかということをもっと考えてこなければいけなかったわけですが、それは実は、あの場所がすごく地震があると、日本で一番売れている教科書に書いてありましたし、地震学会の学者にとってみたら、いつも言っている当たり前で、いつあるかはわからないが、ああ、あるべき地震があった。今回の東北地方の大変大きいマグニチュード9と違って、ここの地震は、いずれあるだろうと、ある意味でわかっていた。

ただ、現象面として、ああいう被害が起きるとのことまでは、みんなが考えていなかったわけで、そういう意味で地震を知らなかったかもしれませんが、地震はそこにあるということはわかっていた。

その辺のことが、地震学者が、実はわかっていたのに、なぜ社会に伝わらないかということもあって、さまざまなことを地震学会はやっていくことになります。そこに私も、巻き込まれました。

六甲山、これは断層の山だということは知られていたわけですが、ハイキングができたり、キャンプができたりするわけです。たまたま、小中学校時代、私と六甲山と一緒にキャンプをしていたボーイスカウトの先輩が、1977年の有珠山の噴火のときに北海道大学で火山の研究者の入り口みたいなことをやっていて、その後、兵庫県の職員になり、地震学会で学校教育委員会というところで活動していて、私に声をかけてきました。

いま、六甲山でも、ハイキングができますし、こういう100万ドルの夜景とかいうような夜景が見られるのも、断層の崖の上から町がすぐ間近に見えるからこんなにきれいに見えるわけです。

一番夜景が見える場所のレストランとか、らせん階段みたいなものとか、恋人たちのメッカになっているんですが、まさにそこが諏訪山断層というところの断層の崖でございまして。よく恋人同士が南京錠に、ラブとか名前とかを書くというのがはやっています。それがいっぱいらせん階段に留めてあるんですが、多くの恋人たちは断層に愛を誓っていることは知らないとは思いますが、そういう場所でございます。

私たちは、そのあとこういう活動をやってきました。

(映像)

どちらかというと、理科の勉強的ではあるんですけども、子どもたちに、楽しみなが

ら、わくわくどきどきしながらサイエンスのセンスオブワンダーみたいなものを感じてもらいながら、地震や火山の現象と、それをもたらすことなどを伝えていこうというわけです。

(映像)

こういう行事を 1999 年から十何年やってきまして、気がついたらジオパークも追いついてきたという感じがしております。いま、「いわて三陸ジオパーク構想」というのが、今回の 3.11 の前から動いていたというのをご存じの方もいらっしゃると思います。

私たちは 1999 年から地震と火山の学会、そして昨年からは地質学会も一緒になってこの行事をやっています。やっている場所は、いま星マークを付けているところがジオパークになっている、もしくはなろうとしているところがございますけども、そんな感じがいたします。地震学会の普及行事委員会という、子どものこの行事をやる委員会の委員長をやっていた私が、ジオパークの委員に入ってきております。

さて、少し長い、くどい自己紹介でしたけども、復興の話でございます。今回の「復興基本法」の基本理念のなかにこういう言葉があります。「一人一人の人間が災害を乗り越えて豊かな人生を送ることができるようにすること」というのがあります。これが、一つの復興の目的であろうと、ここでうたっているわけです。私自身は、復興というものをこんなふうに考えていました。

これは、2009 年に復興学会の議論をするときに手元にまとめたんですが、元へ戻るということと、起こすという概念が両方あって、それがせめぎ合うのが復興なんだろうとか。起きてしまった現象によって、元に戻す難しさが明らかである、なかなか難しいんだけど、ものの大きさ、ことの大きさによってせめぎ合いの、このバランスが変わるのかなとか。失われたものが多いと、コスト概念が多いのかなと。

どちらかという、こちらの今回はコスト概念の方が大きくならざるを得ないのかなと。そのときに、元に戻りたいという気持ちが、なかなかどう受け止めていけばいいのかっていう、そういうことが難しいんだろうと思います。

また、全然まったく違う視点で、私たち神戸に住んでいて神戸の関係の人間としては、地震といえば、兵庫県南部地震のことを指すんですが、皆さまにとって震災といえば、当然 3.11 のことでございますし、地震とか津波という言葉が、たぶんこの関連の言葉を指すんだと思います。その言葉が、例えば続いている限りは、その地震から、災害現象からの復興がずっと続いていることなのかなというふうに思ったりもしています。

基本的には災害というのは、何を失うかによって、誰が何を失う、この復興が変わるんだろうなと思うし、どれだけのものが元からあったのか、それから失った当事者の持っている権力によって、いろんなことによって、たぶん方向が変わるんだろうなと思っ

ております。

実際に、これは復興学会の、復興とは何かを考える委員会で議論するとき、自分で考えたペーパーなんですけど、当時 2010 年の 9 月に、関西大学の准教授の永松（永松伸吾）さんという人がまとめた議論のパワーポイントの一部からはしょって紹介すると、いっぱい言葉がここに出ております。

「持続可能性」「最後の一人まで」という言葉があったり、「復興バネ」「軸ずらし」とか。例えばメカニズム、制度的な話としては、モデルが必要であったり、復興というものをどうやって熟度、どれだけ復興が進んできたのかみたいなことを評価したりとかいうことも大事だろうとか、いろんなことが議論されていまして。

今回の震災を考えていくときに、こういう過去の議論というものが、少しでもお役に立てば、学会として存在意義があると思いますし、まさに今日のお話も、幾つかおうかがいしていて、ああ、そうだろうなと思うことがありました。

阪神淡路大震災ですが、戦後の戦災復興の制度をさまざまに制度を活用したりもしましたし、都市計画の制度もいろんなかたちで使いましたけど、ある意味ではいろんな可能性がもっとあったわけです。

皆さんがここからここへ戻す。区画整理事業が、一番早く終わったところで、長田区の高取商店街というところなんです。1995 年の 1 月がこの写真で、2002 年の 7 月がこの写真で、この段階で一応事業が終わったということですが、こういうところからここに戻すまでの過程を、「平成の自治の道場」というような言い方もされていまして。

そのなかで、こういうところにも花があります。震災後も、こういうポケットパークみたいなものができる、必ずこういうところに弔慰を示す碑がありましたし。そのなかで、誰も死ななくていい町をつくるんだというような決意でやってきたところがありましたし、ハードというだけではなく、一人一人の復興も大事だということもありました。

実際、ちょうど 15 年目に、ずっとまちづくりを中心にやられた方に案内してもらいながら、ポイントを見ていったんですけども。下水処理した水をまちに流して、下水処理した水なので、どちらかというと栄養価が豊富なのですぐ汚れるんですが、その汚れるところをみんなで掃除するような、それによってコミュニティーの力がつくとか。ここに、こんな変なモニュメントがあるんですが、町会っていうか町名ごとにモニュメントをつくって、自分たちのモニュメントとして大事にしていくとかいうようなことをやったり。

区画整理事業によって、何もなくなったところに公園をつくったりするんですが、そうすると、マンションとかが新しくできると、古い町から新しい町になるときに、たくさん子どもたちが町に入ってきて。ちょうどこの 15 年のときに、このコバヤシさんと一緒に見て回ったときに、子どもたちがどこの公園でもたくさん遊んでいる。まるで、われわれが子どものときのようなようだったなという話をして、ある意味町が生き返ったよう

な感じもあります。

イタリアからのわけのわからないモニュメントが六甲駅のところにあるんですが、これでも子どもたちが遊んでいる。子どもがすごくあふれているというのがとても印象的でした。何だろう、復興区画整理事業で、ある意味で町が新陳代謝するときには、ある意味ではよくできているのかなというようなことも話をしておりました。

象徴的な人物の一人、まちの復興をやった中心人物ですが、先ほどの長田区の鷹取商店街の復興の中心人物の一人、まち協(まちづくり協議会)の役員だったんですけども。最初にまちの復興をやって、その後「俺の復興だ」と言って、プロゴルファーになった、本当にうそのような本当の話なんですけど、古市忠夫さんという方がいらっしゃいます。

映画にもなりました。あまりに本当の話がすごいので。5億円をかけて、先ほどの鷹取商店街を復活させて御殿場につくってクレーンで引き倒して、燃やして、そうして再現しました。興行的には失敗したんですけども、こんな。

(映像)

これは本当のNHKさんからもらった映像で、本当の映像ですが。このあと出てくる、燃えるシーンは、御殿場につくって5億円かけて燃やして、全然はやらなかった映画ですが。あまりに、本当の話がすごくて、結局映画にしても、いまひとつ実感がわかかなかったから、はやらなかったのかもしれないですけど、スーちゃんが出てくる映画です。

今回の震災後も、こんな本も出されています。本当に、地域ごとに何をやっていくか。また、マスコミがすごくいろんなことをわかってないが故に、こういうまちづくりをやるというというのは、当然行政が関わってくるわけですが、行政が関わってくると反行政的なことが。報道的にいうといいんだみたいなことで、都市計画の制度が難しいことや理解不足もあるでしょうけど、反対者を英雄にするような報道とか。

ちょっと、大変申し訳ないですけど、たぶん社会学者が研究対象になるのでというんで、どちらかという反対派みたいな話を知恵を付けるとか。そんななかで混乱するようなこともありました。

そんななかで、例えばコミュニティーで、この古市さんが言っていた言葉ですが、「いっしょに遊べば気心が知れる。盆踊り一つできない人は助けられない」みたいな言い方のなかで、コミュニティー力がどんどん付いていながら、だんだんとまちを一緒にやっっていこうというのがあって。ベースには災害直後の、みんなが同じ、あのときしんどい思いをしたという、災害ユートピアみたいな気持ちに寄り添い、みんなが一緒になりながら何とかやってきた、それを「平成の自治の道場」というようなことを言っております。

一方で行政としては、被災者復興支援会議という、県が中心になった場で専門家とか学者、NGOとか、県のプロジェクトチームと一緒に、百数十回の「移動いどばた会議」

をやって、被災者のところへ出かけて行って、どうなっているかとヒアリングをして、隙間を埋めるような制度をつくっていったりもしたこともありました。

今回も、復興庁の支庁ができますけど、そんなようなイメージが、ようやくできてきたのかなと思います。その後、中越の地震がありました。中越地震は、神戸だけでなく、台湾の、特に中山間地で起きました 1999 年の集集（ちいちい）地震というがあったんですが、その辺からも学んでいきました。その中で、一つ象徴的なことがありました。

中越地震（新潟県中越地震）の後、中越沖地震（新潟県中越沖地震）がありましたけど、中越のシオヤの村の住民から、中越沖の刈羽村の住民へ出された手紙を研究者が仲介したんですが「中越の人がどうしても不安から少しでも早く自分の進路を決めたくくなります、でも焦らないでください」と。これは、復興学会の設立のシンポジウムのときに紹介された言葉なんですけど、こういうことが、なかなか被災者に対して誰も言ってくれないので、実際の経験者からこういう言葉が伝えられたということがありました。

あとは、私たちもわからなかったんですが、雪で閉ざされる間が、実は次どうしていくかと、ゆっくり考える時間にもなったのが中越地震です。どうしても、急げ、マスコミも含めて急がなきゃいけないっていうのが正しいように思うし。もちろん、制度とか枠組みは急がなきゃいけないものもあるんですが、急いではいけないところもあるんだろうと思っています。

こんなふうに、仮設の周りに田んぼがつくられたり、復興学会でシンポジウムをやったときには、こうやっていろんな地域の人たちが、いろんな出店をつくって、どうだっというように感じて発表しているわけです。

中国の四川地震のあとだったんですけども、これはマスコミの人ですね、神戸新聞と毎日新聞ですが。このボランティアは、今回は神戸から米沢の方へずっと入っていた人が、これは中国人の研究者ですけども、復興とは愛だという、この様子を見てそんなふうなコメントもしてくれたりしました。

実際に、中越のときでも支援を受け入れるだけではつらくなるということもあって。例えば学生ボランティアが、おいしいおいしいといろんなものを食べることによって、高齢者が元気になったり。地震から3年もたつと、「地震のせいで」というのが「地震のおかげで」というのを語り始めるようなこともできてくるとか。

最近ですと、3.11 の後もボランティアさんを歓待したいという気運が出てきたりという話を、今年のこれも秋ぐらいに聞いたりもするようになりました。その辺は、地元の中かで、災い転じて福となりたいという気持ちとつながりながら、単に受け入れるだけでなく、何かをやって役に立っていくとか、社会に向かって発信していくところがあるとか、それが、たぶんうまくいくと、ジオパークにつなげられるんじゃないかと思っています。

いま、日本中でこれだけのところが、ジオパークというものに手を挙げているんですけど、あつという間に広がりました。ジオパークというのは、あまりジオパークとは何だ

ということを言うのは、私はよくないと言っているんですが、言葉としては「ジオ」という接頭語に公園の「パーク」を付けた造語です。国内で始まったのは、4年前です。いま、100以上の市町村に拡大しています。全国27都道府県、116市町村が、私が理解している限りで、ジオパーク、やっている、やろうとしています。

世界のジオパークというのは、ユネスコが支援する、国際NGOである世界ジオパークネットワークが認定するところが、国内5カ所あります。洞爺湖有珠山、ここは有珠山噴火災害がありました。糸魚川、ここは実は世界で一番最初に糸魚川ジオパークとっていたところで、十何年前からジオパークでまちおこしをしてきました。山陰海岸、それから室戸、この次の西日本大震災の、まさに震源地の真上の層です。それから島原半島、雲仙普賢岳の噴火があったところです。

さらに、日本ジオパークというところが、われわれ日本ジオパーク委員会が認定するんですが、それが15カ所あります。15都道府県の47市町村にわたっています。それ以外に、ジオパークになろうとしている方々が、ジオパークネットワークの準会員として入っていますが、10都道府県の30市町村。これ、目下構想の段階でもこのぐらいのところがあります。

これは、産業総合技術研究所という経済産業省系の研究所と5学会で始めた任意団体なんです、われわれ日本ジオパーク委員会というのは。なんで、こんなに一気に広まったかという、たぶん日本列島の大地は、どこでもジオパークの資格があると。前の京都大学総長の尾池さんがいま委員長なんですが、とおっしゃっているとおり、たぶんどこでもジオなんだろう。誰でも担い手になれる可能性があるだろう。知っているけど、知らなかった地元の魅力発見が結構面白いだろう。ジオパークはなったら終わりではなくて、長く続ける運動であるというので、たぶんみんなが面白いと思っているのかなと。

いろいろな地域振興策があるんですけど、そのなかでいうと、究極のと私たちは思っていますし。また、地域防災を考える上でも、危ない、怖い、ただだと地元が嫌いになる可能性があります。ジオパークというのは、楽しみながら、かつそのリスクも認識していくということで、究極の地域防災支援策なのかなとも思っております。

これは、ジオパークをやろうとしている地域の方に言うことなんですけど、やると、全国に仲間が増えたり、地域が元気になったり、それから学会の専門家が支援する、ずっと楽しめる、知れば知るほどみんなに知ってもらいたくなるから伝えたい。

やったら、ここまですごくかもしれないし。このお客さんが増えるというのは、実は私たちは保証はしていません。「きっと満足度が上がって、増えるかもね」ぐらいの話だと思っています。さまざまな地域のつながりの結びつきが強くなる。これはまさに、いま復興でものすごく必要なことだと思いますし。縦割りの解消も、これも実は復興にもものすごく必要になると思いますし。防災意識も、これから当然ですけども、わからないことってというのが面白くなる。

今回の、3.11のときに、ウンキョウとかいろいろ、サイエンスのことはわからない

という話がありましたけど、難しく考えると、わからないということはよくないことになるかもしれないですが、実際にサイエンスというのは限界があることは、たぶん目の前の、私よりも研究者の皆さんの方が、よくご存じだと思います。それが面白くなる。そういうことによって、地域を研究する科学者も増えていくのではないかなというふうに思っています。

1996年ごろから、国際会議でいろいろ始まったとかいう経緯がありますけど、これは時間がないのでとぼします。来年ぐらいにユネスコの正式なプログラムになる。いまは、ユネスコが認証するNGOがやっていますが、そんなふうなことにもなっています。

これはアメリカですけれども、もともとヨーロッパで始まった。ヨーロッパの例えば地質図というか、あまり私もこんな図は好きじゃないんですけど、何か一目で見ただけだと、日本がぐちゃぐちゃだというのと、ヨーロッパ、アメリカがわりと単純だというのがわかると思います。

だから、これだけ変化に富んでいるっていうことは、それだけ変化に富んだ何事かがあったっていうことで、それは、だいたい地震とか火山とか、何かそんなようなことにつながるようなことをたくさんやってきたという場所なんです。ですから、防災というのは、必ずジオパークのなかでつくらなきゃいけないんですけども、ヨーロッパで始まったときには、防災がありませんでした。

日本のジオパークって、やっぱりいま書いてあるように、変動帯、何かいろんなことが起きてきている。その、ジオという地面の部分と、またそのなかで生きてきた、私達の文化というものを世界に紹介していくことでしょうし、まさに3.11でたくさんの方に支援していただいた、また恩返しと言うとあれかもしれませんが、私たちの国はこういうところであるというものを伝えていかなければいけないのではないかと。もちろん、防災教育のお手本にもなっていくんだろうと思っています。

日本が、ジオパークを動かし始めた2008年の国際会議で、初めてジオハザードという言葉が大事だという話が入ったわけです。実際に、去年の1月に霧島が噴火しましたが、霧島はその1年前にジオパークになっていました。こんなことが、こんなふうになったわけです。新聞に直後に、火山と共存なんかしないといけないということで、霧島の観光業の方が語っています。この辺にありますけど、「新燃岳は生きてる火山、ジオパークに選ばれ火山を売りにしてきたのだから噴火は当たり前」というようなことを、地元の観光業者の方が言っています。

ですから、こんなことはこれまで災害があったときに、特に観光と防災なんて一番遠かったんですが、地元の観光の関係者が、そのようなことを言うようになったということは、普段からリスク認識をジオパークを通じてしていただいているのかなと思います。

国内は、私たちも、先ほどはちょっと、例外的に糸魚川は1997年から地元でジオパークという言葉でやってきたわけですが、ヨーロッパの動きに地質関係者が関係省庁に働きかけて、何か日本でもできないかとずっとやってきたんですけども、なかなか動き

がゆっくりしていて、その中で2008年からようやくことが動き始めました。

最初に、役所もどうしようかと言うんですが、「あ、学会が中心でやってよ」という話になって、5つの学会と、各省庁全部オブザーバーで枠組みをつくりました。私は、日本地震学会から委員に入ったんですが、私たちがジオパークを、2008年から順々に認定を重ねてきたわけです。

それで、理念としては、世界遺産というのは、どっちかというとな保全、大事にするということが大事になっているんですが、教育とか、それからこれは観光ですね、そういうところを、大地と遺産を保全するだけではなく、それを教育に生かしたり観光に生かしたりしながら、運動を続けていくというのがジオパークだろうというふうに思っています。

保全というような意味での活用という言い方もしていますが、ここは世界遺産なんかと大きく違うところだと思っています。言い方を変えると、先祖から預かったこの地がどんなに大切なものかを、よく理解しよその人にも自慢して、飯の種にもしながら子孫を残していくと、このような感じかなと思っています。

ちょっと、時間がないので。有珠山ですとこういう、いまのような災害遺構を残したりとかしていますし。これは、噴火のときには中心人物になった岡田先生なんかも、噴火のときの壮瞥町町長が、ジオパークをずっと推進してきました。これは、町長さんなんですけども。当時、噴火のときの総務課長は、いまのジオパークの事務局長役なんかがやっていました。

お弁当に、こんな「大地の恵みジオ弁当」なんて名前を付けたりしていますが、これは看板もつくったりしたんですが、これは伊豆大島のガイドさん二人が、実はここでバッチンをしているんですが、なぜかっていうと、ちょうど一番見どころの手前のところに看板をつくって駄目だよねって言って怒っているんです。なかなか先頭を切っているジオパークでもそのぐらいの状況でございます。

山陰海岸は、例えば溶岩がこんなふうにな面白く固まったものが見世物になっていたり、この下が有名な城崎温泉ですけれども。ここにある、円山川と城崎温泉と、それからこのコウノトリも全部ジオと関係しているとか、この温泉街が、実は北但馬地震（1925年北但大震災）の後、復興してきた場所であるというようなことも、一つの売りものになっていて、こういう地元の市長さんなんかが一生懸命説明をして、ときにガイド役を買ってでたりしています。

島原半島ジオパークというのも、この雲仙普賢岳というものの噴火災害から、それをただ単に復旧してきましたということじゃなくて、いまの、ちょっとこいつらは余計なんですけども、このなかで例えば200年前の噴火のあとにあった、島原大変肥後迷惑っていう山体崩壊によってこういう湖ができたりとか、そんなものも説明しながら、またこういう水屋敷なんていうものも、ジオの一つの恵みであると言いながら活動が続けたりしてきています。

そのなかで、先ほどの有珠山ですと、こういう工場ですとか。それから島原半島ですと、土石流で埋まった家だとか焼けただれた学校なんていうのは残していったら、それを一つやろうとしています。

阪神淡路大震災では、ちょっと失敗したんですけども。今回、東日本でも残すような動きが出ているのは、ご存じのとおりだと思います。

実際に、これは「釜石の軌跡」といわれた、釜石の子どもたちが逃げていくところなんです。彼らは、どんなことを教育がされていたかという、彼らの教育のなかに、危ないよということだけじゃなくて「海と山に囲まれた釜石市、おいしい魚がたくさん取れるけど、津波が来る」そういう、ジオの両面というものも、実は彼らは教えられてくるなかで、逃げるのができたわけです。

(映像)

これは、田野畑村「体験村たのはた」というところで、この船長がこういうものを説明してくれるんですが、被災地のガイドです。これは、観光ガイドはすでに始まっていますし、ここの宮古のここも(浄土が浜)名勝に指定されたりもしましたし、こんな津波のまま、あとやられたものもそのまま残したままバスが走っていたりとかして、船に乗ってこういうところを見られたりするんですが。反対側へ行くと、宮古の市内がこういうふうに残っているし。

次、田老の大王岩ですか、ここも壊れていなくてそのまま残っているんですが。行く途中はこんなになっているんです。こうやってこんなところを見せてくれるんですが。田老のガイドさんなんかと、こういう先ほどのところなんかで説明をするようなことなことも始まって。そういう意味では、事態に向き合うことから復興が始まるんだろうと思っています。

ジオパークに必要なものは、こんなジオサイトといわれる科学的な価値も必要なんです。人と話、文化、歴史、伝統も必要です。それからテーマとストーリーとかも必要です。ですが、今回東日本ですと、まさにここの大震災からの復興というものが、そのままテーマになってくるんだろうと思っています。

そういう予算とか組織が必要だと思いますが、岩手県の場合は、県が指導してこういうものをやろうというかたちの枠組みをつくってくれますし、皆さんの復興そのものが、人と運動というものになっていったら、そのままジオパークになるだろうと思っています。

実際に、去年の11月の25日に、ここでまさにジオパークの復興シンポジウムをやったんですが、そのときも私を呼んでいただいて、お話をさせていただいたんですけども。構想の経緯という、22年から始まって、最初に2009年の7月に、こんな記事が出たところで知事が読んで、「これは、面白いな、やろうよ」という話になって、実は地震の直前に設立総会を開いていて、そこでストップしてしまったんです。

いろいろな財産があります。北上山地って実は面白いところですよ。いろいろな特徴がありますよということが、これは専門家の少し難しいパワーポイントを、私が簡単にしたんです。ひょっとしたら、世界的な謎になっているものも発見できるかもしれませんみたいな場所でもありあます。

こういうものも、もう一度残そうというのも、ジオパークのなかでやろうとするかもしれない。そういう意味では、物語づくりは必ず復興の過程で、いろいろなかたちでいろんな方が出てくるでしょうから、それがそのままジオパークの物語になってくるだろうと思いますし、たくさんの方に話ることができると思っています。

実際に、このシンポジウムの際に、中越から来られたイナガキさんという方が、先ほどの、急がないでということもそうですけども、実際に復興の取り組みをやっていくなかで、ガイドを始めたら皆さん変わっていった。被災経験の話を聞いてもらうなかで、先頭に立っていくと、ジオパークと同じような取り組みを、実はやってきたんじゃないかという話をしていますし。ジオパークは、地域に誇りを取り戻す運動だ、と思うというような言い方をさせていただきました。

これは、島原のジオパークの杉本さんという方が、災害ではいままで何もなかった人が熱心になったり、動いてくるようになるので、そういう人たちを私たちは、「復興ばか」だと呼んでいるとおっしゃっていますが、そういう復興ばかの人たちが中心になってやってきたのがジオパークだと言っていました。

これは、「三陸鉄道を勝手に応援する会」の草野さんも、いつまでも下を向いて生きていられない、新しいジオパークというのは大いに歓迎するべきじゃないかという話とか。副知事も、世界に散って、そしてしっかり伝えていくこともジオパークで取り組んでいけるんじゃないかという話もさせていただきました。

翌日の被災地巡検のときもいろいろな方が、やれそうだなというお話をしていましたし。最後に豊島さんが、「とにかく多彩で多様な人が集まってきたね」という話を、そのときにもまたおっしゃいました。連携、連帯と言うけども、実際に行動していけるんだからという話とか。地元を提言したジオパークづくりをするために、いろいろな語り部が必要になってくるだろうという話をし合っていますが、実際に今回、東日本大震災のことを東京の研究者と話をしていたときに、阪神とかいろんな、これまでと比べたら、すごく早い段階で語り初めている方が出てきているというのも、こういう運動もあるのかなと思っています。

ただ単に、「いわて三陸ジオパーク構想」というものから、三陸復興ジオパークというような言い方をしてもいいように思いますし。いまだに続く復興のプロセスそのものが、少しずつ見てもらえるジオパークになるんじゃないか。それから、同じ被災地、隣ですが、茨城県北もありますし、同じ東北で男鹿半島とか、それから八峰白神、湯沢なんていうのも仲間になっていけるんじゃないかと思っています。

ジオパークというのは、被災地の勇気と元気を、日本中、世界中にわたることができ

る場所ですし、そのプロセスを伝えていくことで、地元も元気になると思います。また、これを推進するとなると、断然、実践的研究が絶対不可欠なんです。学会が関わりますから。世界遺産が移行するなどの法的枠組みと違って、学会研究が、直接社会研究ができることになると思っています。

ぜひ、山形にもやりたいと思っていますので、連携をよろしくお願いします。ちょっと、長くなりました。どうも失礼しました。ありがとうございます。

○司会 中川先生、ありがとうございました。皆さま、もう一度大きな拍手を、お願いいたします。